
Isolation

黒井 彩華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I s o l a t i o n

【Nコード】

N 1 9 0 3 Q

【作者名】

黒井 彩華

【あらすじ】

大学生・夜四季千秋はある日死んだ両親の本棚からある一冊の本を見つける。

その本との出会いにより、千秋は運命は徐々に動き出す――

Episode 1

誰にだって当たり前に家庭がある

両親がいて、兄や姉、弟や妹、祖父や祖母。そしてそこに自分がいる構成こそ家庭により様々ではあるが家庭というコミュニティは人間にとって必要不可欠である。その家庭というコミュニティが人に与える影響は、その人の人生を左右する程だと言っても過言では無いだろう

夜四季家^{やしき}には両親が居なかった

千秋が12歳の時だった。出張でパリへ向かう際の航空機墜落事故により亡くなったのだった

それ以来夜四季家の生活は長男春樹の収入によって今まで守られ続けてきた

春樹は作家だった。だが相次いでベストセラーを世に送り出したり、はたまたドラマや映画化になったりする程の著名人とは程遠いしくない1出版社の専属作家であった

春樹は両親の事故当時まだ幼かった千秋と夏樹の親代わりをする事を心に決めていた

両親の残したローンの残る中古住宅で、三人は今も暮らしている

午後18時、玄関の扉を開けると、廊下の奥の書物庫として使っている部屋から大量に本が飛び出しているのが目に入った。本に埋も

れるようにして小刻みに動く影を捉えると、彼はふうと一つため息を吐いた

「ただいま。兄さん、何してるんだ」

その声に1拍置いてから、おかえりと春樹は顔を上げて返事をした
少し斜めにずり落ちた太いフレームの眼鏡を正しい位置に戻しながら、春樹は手に持った書物を千秋に見せながら言った

「いやあ、今回書く小説の参考にしたい本があつてね。中々見つからないからって色々引つ張り出してたらこの有様だよ」

「兄さんは探してる途中に本読み出すからいけないんだろ」

やれやれと言った顔で千秋は廊下に散らばった本を集めながら兄の方へと歩み寄った

春樹は少し苦笑いを浮かべて頭を掻きながら傍に積んであるシリーズ物の小説の巻数を見て、あれと言った表情を浮かべた

30巻あるうちの26巻まで読んでいたらしい。本人もそこまで夢中になっているとは思わなかったらしく、手に持っていた27巻を少し申し訳なさそうに傍に積んだ

「本当だな。悪い癖だ。またヒロさんに怒られる」

ヒロさんというのは兄の担当編集者の事だ。兄は基本的に締め切りは守る人だが、ごく稀に締め切りに間に合わない時がある

そういう時は大抵本を読み出して止まらなくなっている時だという事を千秋は小さい頃から良く知っている

少し気恥ずかしそうに自分で散らかした本を何冊か同時に持ち本棚

に戻していく

書物庫には本棚はあるが、本棚に入りきらない数の書籍はダンボールなどに詰められて床に積み上げられている

この大半は春樹の物だが中には生前両親が愛読していた本なども幾つかあった。そういった本はきちんと本棚に並べられ、色褪せないよう布を被せてある

拾い集めた本を棚に入れようと薄暗い書物庫の奥へ入り、手に持っている本が入っていたであろう場所を探した

その時、ふと違和感に気付いた。千秋は本を棚に納めると後ろをゆっくりと振り返った

千秋の視線の先にはあの両親の愛読書を納めてある少し背の低い古びた本棚があった。その本棚に千秋はある違和感を覚えていた

この書物庫を使うのは殆ど兄だけだった。それも頻繁には無く週に1回か2回入るか入らないかくらいだ

書物庫に入ったとしても目的は仕事の為の参考資料を探す事。その参考資料も殆どが床に積まれたダンボールに入っているか、兄の本棚に納めてあるかなので両親の本棚を触る事は良く書物庫を利用する兄でも殆ど無いと言ってもいい

だから両親の本棚は殆ど生前のままなので、この家の者なら違和感があればすぐに分かるはずだった

けど兄はどうやら気付いてはいないらしい。黙々と自分の散らかした書物を本棚に納める作業を繰り返している

両親の本棚には、不自然に大きな本が納められていた。サイズはA4くらいだろうか。布を被せてあるためそこだけぱつこりと盛り上がっているので余計に目立って見えた

殆ど文庫本で納められている両親の本棚には不釣り合いな大きさだ。

千秋は一瞬考えてから、布をそつと捲った

ミステリー小説や恋愛小説、自己啓発の本と一緒に並んでいたその大きな本は西洋のバイブルのような背表紙をしていた
うちはキリスト教徒だったかなと少し記憶をさかのぼってみたが、
そんな記憶は一切無かった

よくよく見てみれば背表紙に書いてある文字も見えない文字だった。ゆつくりと引き抜くとパタパタと横に並んでいた文庫本が静かに倒れた

春樹はその音に気づき、手を休めて千秋の方を見た。そしてすぐ両親の本棚へと視線を移しゆつくりと歩み寄った

兄が近づいてきている事を察して、千秋は声を発した

「こんな本あったか？」

千秋は手に持った金色で縁取られた黒の大きな西洋書から目を離す事無く兄に問いかけた

表紙にも背表紙と同じく見たことの無い文字の羅列があった。金色で文字が書かれている

兄は千秋の後ろから本を覗き込むとーん、と首を捻った

「あつたような、無かつたような…覚えが無いなあ」

「そう、か」

千秋はその言葉に少し違和感を感じた。本当に分らないふうだったからだ

彼の中では兄に「こんな本あったか？」と問いかける前からこんな本は無かつたと思っていたからだ

あまり書物庫に入らない俺がそう思うのだから、一番書物庫を利用

する兄も同じ答えを出すと思っていたからだ
腑に落ちない、といった感じで少し本を眺めた後両親の本棚に布を
被せた

「この本部屋に持ってつてもいいかな」

別に兄はこの書物庫の物を勝手に持っていつでも怒ったりする事は
無いが、これは一応両親の遺品となるわけだしと思い何となく許可
を得なければと思った

そう声をかけた時には兄は既に本を片付ける作業に戻っていた

「別に良いんじゃないか？後で戻しておいてくれればいいよ」

「そうか。ありがとう」

両親の本棚の上に本をぼんと置き、千秋も兄を手伝った
その時何となく、いつもの日常と違う気配がした

Episode 2 (前書き)

自宅の書物庫にある両親の本棚から一冊の不思議な本を手にした千秋
その本には一体何が書かれているのだろうか――

Episode 2

書物庫が片付いた時には既に19時を回っていた。台所からは夕食の良い匂いが漂ってくる

今夜の夕食はなんだろうな、と考えながら千秋は廊下に放り出したままの鞆と例の西洋書を手に2階の自室へと向かった

部屋の明かりをつけ、机の横に鞆を置いた。いつもならこのまま鞆から大学で配られたプリントなどを出して目を通すのだが今日は違った

例の西洋書を机の上に置いて改めてまじまじと眺めた。表紙の見た事も無い文字を除けば何の変哲も無いただの本だ

ハードカバーのようで、表紙はしっかりとしている。そして少しだが光沢もある

そつと指先で表紙の文字をなぞる。金色の文字の部分は少し窪んでいて、どうやら彫ってあるようだった

そしてそのままそつと表紙を開いた。ただ本を見るだけなのに、見えてはいけないものが書いてあるような気がして千秋の中に少しの緊張が走った

意外やその本の中身は白紙であつた。千秋は少し表紙抜けして、脱力した。

なんだ、ただのノートか？何か驚くような事が書かれている事を期待していたので少しがっかりはしたが、その反面何も無かつた事に千秋は少しほつとしていた

しかし一点気になる事があった。ノートと思わしきこの本は一切の日焼けをしていなかった

上質な紙はまるで買いたての本やノートを連想させる。確かに両親の本棚には本が日焼けをせぬようにと布を被せてはあるが、それでも長い年月は両親の愛読書を薄っすらと小麦色に変えていた

事実先程この本を抜き取る時に、隣の文庫本が薄っすら日焼けをしている事に千秋は気付いていた

けれどそんな事はすぐどうでも良くなった。捲つても捲つても白紙のページに千秋はもうすっかり好奇心を削がれていたからだ

（何だか拍子抜けだな…）

あの違和感は両親の本棚にただ変わった本が入っているから感じたものでは無かったはずだった

千秋は確かにこの本自体から違和感を感じたのだが、今ではその違和感は気のせいだったような気がしてきた

書物庫に戻そう、そう思いながら本を閉じようとした時に後半のページに栞が挟まれている事に気付いた

どうせそのページも白紙なのだろうと思いつつも何かを確かめるようにその栞のページを開いた

千秋は目を見開いた。白紙だろうと思ったそのページには絵が描かれていた

絵は何処か西洋の上品な家の部屋と言った感じだった。赤い絨毯が敷かれており、部屋の壁には草原のような風景画が1つ飾られている家具らしい家具は殆ど無く、正面には部屋の端から端まである大きな本棚が聳え立っていた

窓も無いその部屋の真ん中には背を向けて座る一人の少女が描かれ

ていた

黒のワンピースに緋色の長い髪。行儀良く座っているその少女の背中に、千秋は何か寂しげな孤独感のようなものを覚えた

その孤独感を千秋は知っている。小さい頃に味わった事がある。そしてその孤独感は今でも千秋の心を蝕んでいる

お前も俺と同じなのかな、と虚ろな表情のままそつと少女の絵を撫でた。千秋の手が少女の頭の部分を覆った

絵相手に何を感じ傷に浸っているんだろうな俺は――

数秒そうした後、そつと絵から手をどかした。その時千秋はぎよつとした。背を向けて座っている少女は顔を少しこちらに向け、千秋を見つめる形になっていたのだった

驚きのあまり本から手を離してしまった。どさりと鈍い音を立てて本は床に落ちた

少女の絵はまだ千秋を見つめている。千秋は何故だか視線を逸らせないでいた。冷や汗がじわりと額から滲む

どくんどくと脈が速くなるのを感じ、自分が今恐怖しているのだという事を理解した

少女の絵はそつと椅子から腰をあげてゆつくりとこちらへと向かってきた。その間も千秋から視線を外す事は無かった

絵の一番端まで来たところで少女の口は小さく動いた。何かを喋ったようだったがその言葉は聞き取れなかった。

その瞬間本から光が溢れ出し、その光と共に絵の中にいた少女がふわりと実体として姿を現した

千秋はいつの間にかその場に尻餅をついていた。いつついたのかは

自分にも分からないでいる

目を見開いたまま今自分の目の前で起こっている事を千秋は理解出来なかった

口はぽかんと開いたままで、先程までの身の強張りはいつの間にか解けていたが今度は身体に力が入らなかった

少女は金色の瞳を千秋に向け、そっと歩み寄り千秋の前でしゃがみ込んだ。

数秒間二人は見つめ合った。視線を逸らす事が出来なかった。いや、出来なかったのではなく逸らしたく無かったんだと彼は後から気付いた

彼女の虚ろで寂しげな視線に、自分と同じものを感じたからだった先に声を発したのは少女だった

「レイア様では、無いのですね」

少女の声は綺麗な鈴の音のようだった。千秋はその声を聞いて少しばかり落ち着きを取り戻すことが出来た

一瞬寂しげな表情をしたかと思うと、少女は立ち上がり部屋をきよろきよろと見回した

その顔には先程の寂しそうな表情はもう無く少し幼げな少女には似合わない、とても冷めたような表情をしていた

「お前：一体何なんだ？」

必死に搾り出したような声で千秋は言った。何とか声が出せるまで落ち着いてきた

回らない頭で必死に千秋が考えたその言葉を聞くと少女は千秋を見下ろしながら語りだした

「私はメアです。これから私は貴方のガーディアンです。マスター、宜しく願います」

メアと名乗る少女は表情を変える事無くぺこりと頭を下げた。

ガーディアン？マスター？何言ってるんだこいつは。聞き慣れない言葉に千秋の脳内はまた軽いパニックを起こした

千秋はすうと一呼吸した後、ゆっくりと立ち上がりメアと向かい合わせになるような形になった

身長175cmの千秋の肩よりも下に位置するメアの頭を見て、背が小さいという事に気がついた

お前が何言ってるのか分からないが、と言いかけた時部屋の前から声がした

「千秋ちゃん、ご飯だよー」

妹の夏樹の声だった。千秋の鼓動はどくんと高鳴った。そして思った、この状況とてもまずいのでは無いか――

見知らぬ女の子が俺の部屋に居る。これはどういう事を意味するのか千秋にはすぐに分かった

彼女だと誤魔化すにしても無理がある。何故なら彼女が家に入ってきた時一人だったのを春樹が知っているから

急激に汗が噴出してくる。目の前にいるこいつをどうするか、その事で頭はいっぱいだった。

窓から入ってきた事にするか？でもここは2階だぞ。家にそんなにかい脚立なんてない。第一なんで窓から入ってきたんだという事になるじゃないか

千秋は焦りのせいか無理のある事だと分かっている馬鹿らしい言
い訳しか思いつかないでいた
そうこうしているうちに返事が無い事を不信に思った夏樹がいつの
間にか部屋の扉を開けていた

その時の夏樹の驚きの表情は、千秋は一度も見た事が無かった

Episode 3 (前書き)

黒い西洋書に描かれた一人の少女。

少女は突如として実体化し、千秋の前に姿を現した。

メアと名乗るその少女は千秋のガーディアンになると言い出す。
ガーディアンとは一体何なのか―メアは一体何者なのか―。

Episode 3

ダイニングのテーブルには色とりどりのおかずやご飯、味噌汁が湯気を立てていた

ダイニングの隣は続き和室になっていた。4人はそこで卓袱台を囲うように座っている

いつもならテレビ好きの夏樹が真っ先にテレビをつけるのだが、この時ばかりはテレビはつけなかった

ピンと張り詰めた空気に千秋は居心地の悪さを感じていた。多分それは春樹も夏樹も同じだろう

部屋の扉を開けた時、夏樹はかなり同様していた。眉を顰めて少し困った顔をして何かを言いたげに口をパクパクとさせた

やっとの思いでその子は？と聞いた夏樹に対して、千秋は十分な返事をしてやれなかった

とにかく言い訳のしようが無いし、夏樹に見つかってしまった以上春樹にもこのメアという少女の存在を隠しておく事は不可能だと思っただ

そして春樹を呼びつけリビングで事の経緯を二人に話した。その間メアは他人事のように和室を物珍しそうにキョロキョロと見渡していた

「本から…ねえ」

春樹は目を丸くしてメアの方を見た。その視線を感じ取りメアは部屋の欄間に向けていた視線を春樹にと向けた

その金色の瞳はまるで無邪気で純粋な子供のように澄んでいたが、その奥底には何か寂しいものを感じた

「信じられないとは思っけど、本当なんだ。他に説明のしようもない」

「うん、そうだな…。本当なんだろう」

メアに柔らかに微笑みかけた兄はそう言った。千秋はあっさりと事情を飲み込んでしまう兄に少し驚いたけれど思えば兄はファンタジー小説なんかも書いている。こういう事には耐性があるんだろうかと考えると少しだけ納得できたそれに比べて夏樹はまだどうしていいか分からないといった表情をしている。普通ならこういう反応が正しいのだろうなと千秋は思った

そんな夏樹を差し置いて千秋は話を進めた。それはこのメアという人物についてだ

何故本の中にいたのか？どうして本の中から出てくる事が出来たのか？そもそも人間なのか？

疑問は尽きない。千秋は重い口を開いた

「お前は一体どういう生き物なんだ？」

「どういう生き物？」

「例えば…人間じゃないなら宇宙人だとか、吸血鬼だとか、狼人間とか…幽霊とか」

普段聞き慣れないような言葉を羅列してみる。宇宙人とか吸血鬼とか自分でも少し馬鹿らしいと感じた

メアはきょとんとした後、千秋の部屋からリビングへ移動する際に持ってきていたあの西洋書を卓袱台の上に置いた

ぱらぱらと白紙のページがいくつか続いた後、一つのページの所で止まった。メアの居たページだ

当然の事ながら、部屋の真ん中の椅子に座っていた少女はいない

「私はメシアと呼ばれる人工生命体…つまり人造人間みたいなものです。200年前にイリア様の手によって生み出されました」

「人造…人間…」

にわかには信じられないとはこういうことか、と千秋は一人心中で呟いてみた。

しかし目の前にいる絵の中から出てきた少女を見て、千秋は既に有り得ない事が起きている事を再認識して有り得ない話も認めるしかないのだという事を悟った

メアは自分の居た部屋の絵を眺めながら続けた

「メシアは本を開いた者をマスターとして守り続ける事が使命です。貴方方に危害を加えるような事はありません」

メアは千秋たちの言わんとしている事が分かっていた。見知らぬ怪しい者が突如として現れれば誰だって身の危険を感じるものである。例えばそれが女子供の身形をしていようが関係ない

信用されない事を分かっているのか、その言葉はいやに冷たく感じられた

メアの言葉に千秋は一つ引っかかりを感じた。守り続けるって何だ？という事だ

まさか、と思いながら言葉の意味を考えた。いくら自分にとって都

合の良い様に捉えようとしてもそれは難しかった

分かりきった答えを聞く事程苦痛な事はないが、自分の思っている事とは違う答えであってくれと淡い期待をしながら問いかけた

「守り続けるって…ちょっとまで、もしかして俺このまま付き纏われるのか？」

「はい。そうなります」

きっぱりとした声で言われてしまった。それも躊躇いもなく
メアは当たり前といった表情を浮かべている。千秋はあまり驚く事
無く大きなため息を一つ吐いた

「そうなりますって…お前簡単に言ってくれるな」

頭がズキズキと痛み出すのが分かる。そして突き刺さるような兄と
妹の視線

健康だけが取り柄のだったはずなのに、身体のあちらこちらが無意
味に痛み出したような気がした

さてどう切り返すかと考えてるうちにメアはゆっくり立ち上がった

「ご迷惑でも、この誓いは取り消す事出来ないんです。ごめんなさ
い」

そう言うと本が光だして、メアはみるみるうちに光に包まれた。光
が消えた頃にはメアの姿は和室から消えていた

驚く春樹と夏樹をよそに、千秋は本を覗き込んだ。そこには最初見
た時と同じように椅子に背を向けて座る少女が描かれていた

Episode 4 (前書き)

「貴方を守る―」

そう言つて本へと戻つたメア
戸惑う兄と妹。そして千秋―

千秋の気持ちはどう動くのか―

Episode 4

自室に戻った時には時刻は21時を回っていた

その後、すぐに食事をした。

食卓は終始無言で重たい空気が渦巻いていて、何を食べても味がしなかった

夏樹が料理が下手な訳ではない。ただ空気の問題なのだがいつものように上手いと言って食べれないのが申し訳なかった

外はもうすっかり暗くなっており、部屋の窓を開けると冷たい風が金木犀の匂いと共に部屋に流れ込んできた

秋も半ばの10月というこの時期が千秋が一番好きだった。物憂げで何もかも儚げなこの季節に自分と似たものを感じたから

何もかも冷めた目でしか見れず、感情表現を忘れた自分に

ベッドに横たわり風を感じた。

その傍らにはメアの本。無意識のうちに持ってきていたらしい

目を瞑り、一分程してから目を開けてみる。本は確かに傍にある。夢ではない事など先程から分かっているはずなのに、と心の中で自分を嘲った

「なあ、話…ちゃんと聞かせてくれ」

仰向けになっただまそう呟く千秋の視線は窓の向こうに向けられて

いた

本は薄く光るとばらばらと勝手にページが捲られていく。絵のところで止まると輝きを増した光と共に少女は姿を現した

彼は起き上がりベッドの縁へ座った。目の前にいる少女は冷たく無感情な視線を真っ直ぐ千秋に向けていた

「お前はどこから来て…どうやってうちに来たんだ？」

千秋は既に少し諦めにも似た覚悟を決めていた。この少女がどんな事をしてても自分の傍から離れないような気がしたから

それは彼の勘に過ぎないが、それ以上に本を手にした時からそんな不思議な予感めいたものを感じていたからだった

メアは表情を変えること無くその場にぺたりと座り込み、千秋を見上げる形になった。その姿はまるでつきりとした主従関係を表した主人と召使いのようだった

「私は…元々本の世界にいました」

「本の世界？」

メアは小さく首を縦に振った

「レイア様の創った本の中の世界。そこで私達メシアは暮らしていました」

レイア様、先程もメアの口から聞いた名前だった。千秋は一つ一つ

突っ込んで聞きたい気持ちを抑えて黙って聞いた

「その本の世界が100年前突然消え、私達メシアは外の世界に散々に放り出されました」

「外の世界って言うのは、つまりこの今俺達がいる世界の事だよな？」

「はい」

その時、一瞬メアはとても悲しげな表情を浮かべた。その表情からはいつか自分が味わった事のある深い悲しみを感じた

「100年の間、色々な場所を彷徨い続けて一ヶ月程前この家に辿り着きました」

「一ヶ月も前からあったのか…気付かなかったな」

「気付かなくて普通なんです。メシアは本来人の目には見えない本ですから」

え、と千秋は声を漏らした。人の目には見えないとはどういう事だ？自分の目にはメアの本が確かに見えている。先程だって触ったばかりだ

メアに答えを求めるように千秋は顔を顰めながら視線を投げかけた。メアはそれに答えるように鋭い視線を返した

「メシアには人とは違う特別な力が備わっています。その力が悪用されぬよう、メシアの本は普通の人間には見えないように創られているんです」

「でも俺は見えてるぞ。それに兄さん達だって」

「一度手にすると、その手にした人間を介して他の人間もその本を見る事が出来るようになるんです。ただ…」

メアはそう言いかけて不思議そうに千秋を見つめた。数秒間見つめ合った時、千秋は何となく照れくさくなり目を逸らしてしまった。女の子と目を合わせる事に慣れていない彼にとっては、その数秒間はかなり長い時間のように感じられた

「何故貴方に私が見えたのか…分からないです」

小さくメアは呟いた。千秋は逸らした視線をゆっくりとメアの方へと戻した。目が合わない程度に気をつけながら顔を伺ってみたが、メアは不思議そうな顔をしたままだった

「つまり俺は…運が悪かったのか」

千秋ははあと大きく一つため息を吐いてうな垂れた。普通の人には見えないものが見えて、俺はそれが見えた為にこんな事になってしまった

特別何か危害を加えられたわけでも無いが、この先こいつと一緒に居ればこの先間違いないく面倒事に巻き込まれるに違いない。俺の勘がそう言っている

そう思えばため息の一つや二つ、いくらでも出る

「燃やして下さい」

はつきりとした声で少女は言った。その声は冷たくて無感情な声だ

った

千秋はその言葉の意味をうな垂れたまま考えた。しかし1分程考えたところで思考するのをやめた
何となく意味が分かってしまったから

「本当なら誓いを破棄する事も出来ました…だけど本の世界が消えた時その方法の記憶も一緒に私から消えてしまった…他に誓いを消す方法は…本を消滅させるしかないのです」

そう言いながらメアは本を手にとると千秋の前に差し出した
本を消滅させる。本の中で生きていたこの少女にとってそれは何を意味するのだろうか？

少し考えれば分かる事だった。本を消滅させる事、それはこの少女の死を意味する――

千秋は目を見開いた。驚きのあまり口は半開きになっている
顔を上げて本を差し出す少女を眺めた。その表情は死を目前にしている者の表情とは思えない程落ち着いていた。まるでこういう結末になる事を悟っていたかのように

「私が消えれば、誓いは無くなります。だから、どうぞ」

死を前にしても尚躊躇いの無い言葉。冷めた瞳。感情の無い人形のような表情

ああ

まるで

俺みたいだな――

「それは…出来ない」

気付くとそう言葉にしていた。目の前に差し出された本を受け取り
ばらばらとページを捲った

分厚い本のページはメアの居た1ページを除き全てが白紙

こんな寂しい所に、100年間も。誰にも気付いてもらうつ事無く。
ずっと独りで―

ぱたりと本を閉じて、ベッドを立つと窓際に向かった。澄んだ夜空
には幾つもの星が見えた
明日はきつと秋晴れだな。そんな事を思いながら夜空の星に目を向
けていた

「誓うよ」

「え…」

少女は少し上擦った声を漏らした。窓際で頼杖をつきながら星空を
眺めていた千秋はそのまま続けた

「守ってくれるんだろう？俺の事。良く分かんが」

「え、あ…」

「違うのか？」

きつとこんな事言われるとは思っていなかったのだろう。かなり困
惑しているようで返答に戸惑っている

顔を見なくても困っているのが分かる。それが少し面白くてわざと意地悪な言葉を投げかけた

「い、いえ……… 違います。でも…嫌なのでは？」

「自分でも分かん」

本当は何となく分かっていた。こんな事を言い出した理由を同情の気持ちもあるが、一番の理由は自分とあまりにも似ていたから放っておけなくなってしまったのだろう

厄介事を自分から受け入れてしまうなんて、本当に馬鹿だな。そうも思っただが後悔はしていない

何故なら、この少女の命を奪う事をしなくて済んだから

Episode 5

空は雲一つ無い晴天。千秋の昨晚の予想は見事に当たったのだった。気持ちのいい秋風を身体全体に感じながら、大学への道のりを少し重たい足取りで進んで行く

いつもの通学用鞆には、メアの洋書が入っている

こうして行動を共にする事になった訳は、1時間前の朝食時に遡る――

「目的？」

「そう。どういう訳だか分からないが、とにかくこいつは本の世界からやってきて、その世界に戻る方法を探すのが目的らしい。だからその方法が見つかるまでの間、家において欲しいんだ」

これは俺が昨晚必死で考えた嘘だ。メアとの誓いを承諾してしまった以上、メアは必然的にこの家にいなければいけなくなる。

そうなれば家族の同意を得なければならない。流石に無断で女の子を寝泊りなんてさせられない。犬や猫とは訳が違うんだから

その兄を納得させる為に考えた嘘。しかしこんなぶっ飛んだ理由で見知らぬ怪しげな女の子を寝泊りさせる事を許可してくれるかどうか、内心ハラハラしていた

「良いんじゃないかな」

「うん、私も賛成だよ！」

「…へ？」

笑顔で返答する春樹と夏樹。思いがけない返事に千秋は少しぼかんとした

「え？えーと…いい、良いのか？」

「女の子一人外に放る訳にもいかなかったら？俺は別に構わないよ。家族が増えたみたいで嬉しいしね」

「私も妹が出来たみたいで嬉しいなあ！」

夏樹は目をきらきらさせながら一人ではしゃいでいる。それを嬉しそうに春樹は見つめていた

昨日の夕食時とは打って変わって楽しい食卓。少しだけ二人の反応に疑問を抱いたが、すぐに快諾してくれた理由が分かった

俺達には両親がいない。頼る人がいない辛さはもう小さい頃に嫌という程味わった

―うちでは、預かれないわねえ

―お兄さんはもう大人だろう？君達だけでも生活出来るんじゃないか？

―餓鬼は嫌いなんだよ。もう来ないでくれ

幼少期の記憶が千秋の頭を過ぎった

ああ、こんな事言われてたっけな。兄さんには苦勞させっぱなしだ

「ありがとう兄さん。迷惑かけてばかりで…」

「迷惑なんかじゃないさ。ちょっと変わった子だけど…悪い子ではなさそうだしね」

千秋はふつと笑みを浮かべた。そう、悪い奴ではない。

自分を殺してと本を差し出した時の、あの悲しそうな表情を見た時にそう感じた。

「いけね。そろそろ行かないと」

時刻は8時を回っていた。慌しく玄関先へと向かい靴に足を乱暴に突っ込んだ

「マスター……」

か細い消え入りそうな声が俺の足を止めた。振り向くと眠そうに目をこすっているメアが立っていた

その少し間の抜けた表情を見る限りでは、人造人間等という異様な人種には全く見えなかった

「何処、行くのですか？」

「学校だよ。…ああ、そうだ。帰りに図書館寄ってみようと思ってたし、お前も来るか？講義中は本に入ってもらえれば大丈夫だろうし」

「あ…はい。ご同行します」

そう言うとメアは腰に下げたブックホルダーから本を外して千秋に手渡し、メアはその本へと入っていった

本を鞆にしまう前に、メアがいるページを開いた
そこで幸せそうに眠っているメアを見て、笑みが零れた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1903q/>

Isolation

2011年10月8日15時19分発行